

令和元年度第3回行政評価委員会（暮らし部会）会議録

1 開催日時

令和元年7月24日（水） 午前10時～午前11時30分

2 開催場所

生涯学園都市会館 3階第5学習室

3 出席者

(1) 委員 4名

鈴木健委員（部会長）、久保田廣美委員、福盛田弘委員、曾我紀子委員

（欠席：高橋徳好委員）

(2) 説明者（施策主管課及び関係課） 2名

都市政策課：佐々木賢二課長

観光課：伊藤浩平主査

(3) 事務局（施策及び事務事業担当課） 3名

秘書政策課：瀬川千香子企画調整係長

財政課：松田隆課長補佐兼経営財務係長

4 議題及び報告事項

市が実施した施策評価のうち、花巻市行政評価委員会の評価対象施策である「公共交通の確保」について評価を行った。

(1) 施策主管課による説明、質疑応答

(2) 委員会の評価結果集約

5 議事録

(1) 施策主管課による説明、質疑応答【主な意見・質疑等】

久保田廣美委員：新花巻駅の乗降客の状況は、駐車場の整備によって増加しているか、それとも変化はないのか。また、空港の利用者は増えているようであるが、飛行機への搭乗率はどのようになっているか。

佐々木賢二課長：新花巻駅の乗降客数は、震災で減少した時期もあるが、ここ数年横ばいである。一方、駐車場の利用者数は年々増加しており、駐車場の整備が新花巻駅の乗降客数増加に直結しているとは数字上は言えないが、釜石自動車道が全面開通し、沿岸方面からの利用者が増加するのではないかと考えている。

伊藤浩平主査：花巻空港の利用者数は8年連続で増加している。各路線とも搭乗率も微増している。しかし福岡便だけは搭乗者数が増加しているものの、平成29年度から機材の大型化に伴い、50人乗りから70人乗りになったため、搭乗率は少し落ちた。また、台北線はだんだん定着してきたこともあり、搭乗率7割台を推移している。LCCの経営面では搭乗率8割超が理想とされているので、このラインを超えるように県、

台北サイドとともに頑張っている。日本人の搭乗率も上がっており、3割は日本人の利用客である。しかし、上海線は日本人の利用が全くない。1月に就航を開始したのは、2月の春節の需要を見込んだものであったが、春節も桜のシーズンも終わった今では搭乗率5割以下と低調である。日本人向けという面でもそうであるが、台北線のような定着についても検討していく必要がある。

曾我紀子委員：バスの本数が少ないからバスに乗らないということである。今後高齢者も免許所有者が減っていくと思うが、バスの本数が少ないから乗らないということになると、運行しているバスが無駄になってしまうと感じる。バス路線を減らそうとする意図はどこにあるのか。子供の目線もないように感じる。

佐々木賢二課長：バス路線を減らそうとしているわけではなく、バスを運行している岩手県交通の経営状況が良くなければ廃止になるというのが根本的なところである。岩手県交通に運行してもらえるのが市としては一番いいが、定期的なバス運行が維持できない、バスの運転手を確保できないという問題もある。大迫はそうした背景の中で、支線バスがなくなったため、市では代替えとして移動手段を確保したということがある。市としてはバス路線を維持していきたいという気持ちはあるが、経営的な問題で維持できていない状況である。これは花巻市だけではなく、全県的な課題である。

曾我紀子委員：「5 施策を構成する事務事業の検証」の「バス事業」という事業が「4 施策構成する事務事業一覧」のどの事業に該当するかが分かりにくい。

福盛田弘委員：高齢者が増えている中で、バスの本数が少ないといったことは花巻市の課題だけではない。東和町の田瀬地区でもほとんどバスはなくなってきている。利用者が少ない中で、乗り合いタクシーを使っているところもあるが、高齢者の免許返納が増えるほど、公共交通の不便さが出てくる。また時間にあつた移動手段がなければ不便さを感じると思う。

また、土沢線のバスを利用して、宮沢賢治記念館の入館料免除が行われているが、この免除制度により、どのくらいの入館実績があつたのか。

佐々木賢二課長：土沢線の輸送量については、岩手県交通のデータによると、平成29年度と平成30年度の比較では横ばい傾向にある。年間の合計で言えば収入は若干増加しており、入館料の免除制度は若干ではあるが成果を上げている。

また、入館料の免除制度は宮沢賢治記念館、宮沢賢治童話村、新渡戸記念館、博物館の4館を対象としている。この制度はバスを利用してもらうことを目的としており、平成30年8月から開始したものである。平成29年度との比較では、4館合計で、入場者数は7,980人増加している。増加の要因は土沢線利用者への入館料減免制度だけによるものではないと思うが、数自体は増加している。

鈴木健委員：施策評価シートの2の成果指標のところ、公共バスの利便性に満足している市民の割合が、平成26年度の目標値50%から平成28年度以降43%に下がっていることについて、どう理解をすれば良いか。基本的には利便性と満足度が下がりながらも維持しようとするものなのか。そうすると「施策の目指す姿」の成果を図る指標としては、数値が上昇することが目標になると思うが、どう考えているか。

佐々木賢二課長：高いコストをかけて高い目標をかかげる方法もあるが、現状維持も難し

いのが現実である。市の地域公共交通網形成計画においても、民間ができなかったものを市が代替する移動手段を手当てすることになっている。積極的に利用者を増やす方策として、周知など利用促進策を打っていくということもあるが、まずは、現状維持を目指すと言うのが現実的。

鈴木健委員：基本的には民間路線バスの廃止はダメだということを前提に、市民の公共交通における利便性と満足度を維持していくためということで、目標はそのように設定しているということか。

佐々木賢二課長：花巻市の考え方として、大迫、石鳥谷、東和から花巻の中心部に出てくる幹線路線バスは、赤字になったとしても維持する。地域内移動については、大迫の場合は、支線バスが廃止になったため、予約応答型乗合交通で代替している。東和地域でも市営バスがなくなったので、予約応答型乗合交通でカバーする。石鳥谷はもともと路線バスがなかったため、オンデマンドタクシーで対応していたが、旧3町で同じサービスで揃えて地域内移動ができるようにした。旧花巻市内でも、西南地域では柘内線が廃止になる見込みのため、形は3町と変わるが、予約応答型乗合交通で対応していくこととしている。

その先については、岩手県交通も方向性を示していないので今後ということになる。ただ、市民の移動手段としては公共交通に限らず福祉タクシー等も合わせて考えるべきであり、将来的には公共交通単独で考えていくことは難しいのではないかと。

福盛田弘委員：ふくろう号について、運行ルート上、自宅近くを通らないため、乗りたくても乗れないという声が多い。ルートを拡大する考え方があっても良いと思う。また高齢者や障がい者に対しては、タクシーの乗車券を発行しているようなので、バスの乗車運賃も高齢者や障がい者に対する無料化を検討できないか。こうしたことも公共交通の利用促進の1つになると考える。

佐々木賢二課長：ふくろう号の利用者は年々増えているが、今の路線を変えると既存の利用者が、利用できなくなることになる。現在の運行ルートは、花巻市のまちづくりの考え方である立地適正化計画に沿ったエリアの中で、既存のバス路線と重複しないところとしている。少しエリアを広げると、当初の運行の考え方と変わってきてしまうので、慎重にならざるを得ない。

また、高齢者と障がい者の運賃無料化については、これまで検討したことはない。運賃は、岩手県交通の収入に直接結びつくものである。運賃無料化が、大きく利用促進につながるならば補助金措置なども検討できるが、現状は自力でバス停に行くのが大変な人や、自宅近くを通らないという人が多いということであり、今の利用状況では難しい。

久保田廣美委員：様々な取り組みを行っていることや努力をしていることは分かるが、シートに反映されていないように思う。反映させた結果、生まれた成果が書かれていれば良いと思う。

また、「5 施策を構成する事務事業の検証」の中で、「…沿岸地域や市外からの新花巻駅駐車場利用者増加を見据え…」としているが、市の事業としてやっていることを踏まえると、こうした面は強調しない方が良いと思う。

佐々木賢二課長：新花巻駅の利用者を増やしたいというのはある。早い新幹線（はやぶさ）がもっと止まってほしいということ。新花巻駅は県内では盛岡以南で最も利用者が少ないというのが実態である。

曾我紀子委員：花巻空港駅といわて花巻空港との接続として、バスの運行などはないのか。

伊藤浩平主査：かつては二枚橋という駅であったが、花巻空港駅という駅名が誤解を生み、空港利用客が下車するケースも多い。JR の駅から空港へのアクセスは花巻駅でも花巻空港駅でも大きくは変わらない。

(2) 委員会の評価結果集約【施策評価検証シートの整理】

● 「◎前年度評価の振り返り」において前年度の「Check＝評価」⇒「Action＝見直し」が機能しているか

鈴木健委員：それぞれ前年度のチェックに対応する形で見直し内容は書かれている。ここは、前年度の評価と見直しが機能しているということで整理する。

● 「5 施策を構成する事務事業の検証」が的確に行われているか

久保田廣美委員：バス交通の利用者は少ないが、生活上困るという視点から見れば必要性は低下していない。

鈴木健委員：この記述は「②投入コストのわりに成果が低い事業」という観点で書かれているものである。また、先ほど指摘のあった「バス事業」という標記については、過去の行政評価委員会で逆の指摘があった。事務事業名が固いもので、市民にはどういった事業をやっているか分からないため、一目で分かる表現にした方が良いという意見があり、それに沿う形でバス事業という記載になったのだと考える。

久保田廣美委員：駐車場整備について、新花巻駅の利用者を増加させることが目的なのであれば、地域を限定せずに、新花巻駅利用者の増加を目指すものとする方が良い。

鈴木健委員：久保田委員の意見を検証に加えた上で、全体としては的確に検証が行われているとして整理する。

● 「3 成果指標の達成状況」の「(達成状況に関する背景・要因)」の分析が的確に行われているか

鈴木健委員：達成状況に関する背景・要因の分析は、いずれの成果指標についても的確に行われているとして整理する。

● 「6 施策の総合的な評価」が的確に行われているか

鈴木健委員：他の項目はバスの内容を説明し、空港の内容を説明しているが、この項目では、先に空港の内容を説明しバスの内容を説明しているため、他の項目と順番をそろえた方が良い。

福盛田弘委員：「今後の方向性」に記載のとおり、冬場の旅行商品の造成は必要。冬に観光客が減少しており、空港の利用者が減っているということと思う。または冬場におけるイベントなども必要と思う。

鈴木健委員：特に問題なく的確な評価が行われているという結論でまとめる。

●「シート記載内容全般について」

曾我紀子委員：公共交通の利便性が低いことも、若い人が都市部に流出していく原因の1つになっていると思う。